

「西洋への扉をひらく」開催！



横浜シティ・フィルハーモニックによる演奏光景

平成一八年（二〇〇六）二月一日、はまぎん産業文化振興財団と当館とが主催する「講演&コンサート・西洋への扉をひらく」が、みなとみらいの「はまぎんホール・ヴィアマーレ」で開催された。はまぎん財団と当館とが共同主催する文化事業は、今回が二回目である。

第一部講演「横浜開港ことはじめ」は、当館調査研究員斎藤多喜夫によって、資料画像をスクリーンに映しながらすすめられた。ペリーが来航して初めて日本人が触れた西洋音楽・洋服・写真・蒸気車・電信機・パン・食肉などの西洋の文化や文物が、その後どのように日本に普及してゆくの。開港後の横浜は西洋の窓口となってきたさまざまな「ことはじめ」を生んだ。

ペリーが幕府に献上した電信機や小型の蒸気車は、横浜での条約交渉

の際にお披露目された。遠く離れた場所にも信号が届く。煙を吐いてクルマが自走する。みたこともないみやげ物に幕府の役人は目を見張った。そのうち電信機は、明治元年（一八六八）二月二五日、横浜裁判所内の電信機役所が京浜間の公衆電報の受付を開始して普及がはじまった。

蒸気車は明治五年に横浜・新橋間の鉄道開通をもって日本人に親しみのある交通手段となってゆく。

西洋音楽もペリー艦隊が運んできた文化である。明治二年一〇月横浜北方の妙香寺で薩摩藩軍楽隊がイギリス陸軍フェントンから軍楽の伝習を受けたことが西洋音楽導入の端緒となった。しかし日本では軍隊と学校の間を除いて、庶民に西洋音楽はなかなか普及しなかった。洋服も同じである。日本人は選択的に西洋文化を吸収したのである。

第二部、コンサート「黒船がはこんだメロディー」ペリー来航と音楽」は、日本に来航したペリー艦隊が奏でた音楽を、オーケストラで再現する企画である。演奏は横浜シティ・フィルハーモニック、指揮は石井誠一氏がつとめた。横浜開港資料館が所蔵するペリー来航関係資料をスクリーンに映写し、平野が解説を交えながら演奏をすすめた。

海軍の軍艦には軍楽隊が乗船している。嘉永六年（一八五三）六月九日、ペリーが久里浜に上陸したとき、演奏されたのは、「愛国歌」のひとつである「ヘイル・コロンビア」や「アルプス二万尺」のメロディーであった。翌年に日米和親条約交渉で横浜に上陸した時は、今日米国歌となっている「星条旗」や「ヘイル・コロンビア」が奏でられている。

幕府側の役人との交歓の場では、当時の流行作曲家S・C・フォスター（一八二六～一八六四）の「主人は冷たい土の中」や「アンクル・ネッド」が歌われた。ペリー艦隊はその後日本でもよく知られることになるメロディーを運んできていたのである。

第二部の企画については、放送大学笠原潔氏の研究『黒船来航と音楽』（二〇〇一年刊）によるところが大きかったばかりか、笠原氏は収集した楽譜や音源を参考資料として提供してくださった。深くお礼を申し上げる。

第二部の終わりにあたって笠原氏にコメントを求めた。笠原氏は、現在幕末・明治初期に山手に駐屯していた英仏軍が奏でたメロディーを研究中であり、英仏駐屯軍の音楽も今日と同じような企画で再現できたら楽しいと思いませんか？と問いかけられた。これに、会場の皆さんは大きな拍手で応えていた。

ボランティアで演奏を引き受けてくださった横浜シティ・フィルハーモニックの皆さん、そして単純な旋律譜をオーケストラ譜に編曲し、指揮をされた団長の石井誠一氏にもお礼を申し上げる。資料館は紙の上に記された情報を扱うが、人間は五感で物事を受け止める。聴覚にうったえる歴史企画は、これまであまり取り組んだことがなかった。横浜開港資料館にとっても、今回の企画は新しい一歩となった。

（平野正裕）

講演&コンサート
西洋への扉をひらく

講演 横浜開港ことはじめ
斎藤多喜夫 横浜開港資料館調査研究員

コンサート 黒船がはこんだメロディー
ペリー来航と音楽
指揮 石井誠一
演奏 横浜シティ・フィルハーモニック
指揮 石井誠一
演奏 手野正裕 横浜開港資料館

はまぎんホール
ヴィアマーレ
2006年2月19日(日)

13:00開場
14:00開演
(16:30終演予定)

入場無料

お申込先・お申込方法
【申込先】はまぎん産業文化振興財団 電話 045-225-2171
【申込先】はまぎんホール・ヴィアマーレ 電話 045-225-2173
http://www.yokohama-venue.or.jp
【申込先】はまぎん産業文化振興財団 横浜開港資料館
【申込先】はまぎん産業文化振興財団 横浜開港資料館
【申込先】はまぎん産業文化振興財団 横浜開港資料館

お問合せ
【財】はまぎん産業文化振興財団 電話 045-225-2171
【財】はまぎん産業文化振興財団 電話 045-225-2173
http://www.yokohama-venue.or.jp
【主】はまぎん産業文化振興財団 横浜開港資料館
【主】はまぎん産業文化振興財団 横浜開港資料館
【主】はまぎん産業文化振興財団 横浜開港資料館

それは
港から
始まった

音楽

大太鼓や横笛、らっばを持つた米国の鼓笛隊が、スクリーンに映し出された。150年以上前に横浜や浦賀に上陸した様子が描かれた「黒船絵巻」だった。

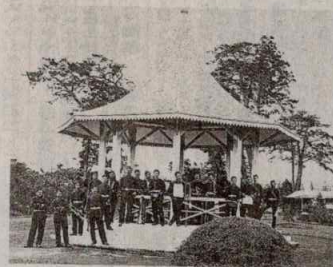
そんななか、横浜シティ・フィルハーモニックは「星条旗」



横浜シティ・フィルハーモニック

や「ヘイルコロンビア」など13曲を響かせた。

ペリー提督が幕末、横浜に上陸した時、演奏された音楽を再現しようというイベントが06年2月、横浜市内で開かれた。演題は「黒船がはこんだメロデー」。



山手公園野外音楽堂—
横浜開港資料館所蔵

「上陸する乗組員は、日本側の絵師によっても記録されました。約40人が軍楽隊と鼓笛隊でした……」

イベントを考えた、横浜開港資料館主任調査研究員の平野正裕(48)は、曲の合間に背景や当時の様子をマイクで説明。映像も次々に映し出された。

観客約700人は、スライドを交えた演奏で、150年前の横浜を旅した。盛況のため、同年9月に再演された。

元放送大学教授の笠原潔の著書「黒船来航と音楽」を参考に構想。笠原が米国から持ち帰った古い楽譜は、平野から横浜シティフィル団長の石井誠一(52)に手渡された。

当時とは楽器も違う。約1ヵ月かけて、現代のオーケストラ仕様にアレンジした。

ペリーの滞在中、宴席や葬儀で、当時の流行曲や鎮魂歌、賛美歌が演奏されていた。

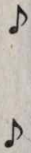
初めて接した西洋音楽に、平野は「当時の日本人は黒船が運んだメロデーやリズムを案外

1859~
開港150年へ

クラシック

黒船が運んだオケの芽

抵抗なく受け入れたのではない
か」と考える。
西洋音楽は浜風に乗って、そ
の後、日本中に広がった。



る、市内には市民オケが相次い
で誕生していた。
来年は発足30周年。最初の数
年は団員が10人にも満たず、練
習場探しにも苦労した。それで
も年2回の演奏会を続けた。

「世代も職業も違う人が集ま
り、音楽をする時間は本当に楽
しい。続けていくよかった」



石井 誠一

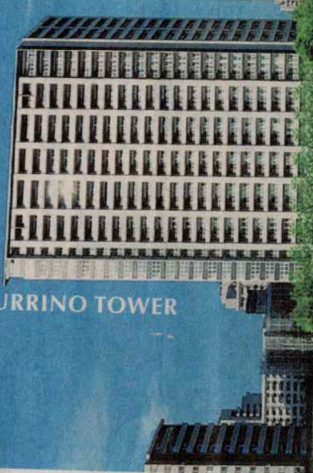
ンの一節を奏ではじめた。

「タタンタン……」「音程が悪
い」「リズムを正確に」……。

石井の指示で何度も演奏が止
まり、また始まる。約4時間、
それを繰り返していた。

ペリーの音楽を再現した横浜
シティフィルは、約70人が参加
する自主運営の市民オーケスト
ラだ。団員は10〜60代。80（昭
和55）年、教員になりたての石
井が仲間と立ち上げた。同じこ

AZZURRINO TOWER



多摩川対岸よりアクリルナタワーノタワー

AZZURRINO TOWER ■アクリルナタワー・アズリーノタワー
 築面積/1186.23㎡ ●延床面積/17100.34㎡ (容積算入対象外面積5.23
 ルノ一) ●面積/13.20㎡ ●グランドポーチ面積/4.45㎡ ●16.11㎡
 払い ●協議会運営費/月額200円～330円 ●インターネット使用料/1.73
VERDE TOWER ■アクリルナタワー・ヴェルデタワー 物件概要
 ゲストルーム1戸 ●敷地面積/2574.45㎡ ●建築面積/998
 ㎡ ●71.03㎡～82.00㎡ (トランクルーム面積0.45㎡含む) ●バルコニー一
 (引渡時一括払い) ●管理準備金/26,420円～30,500円 (引渡時一括
 イクルポート/125区画 月額使用料無料 ●バイク置場/月額使用料200

ROSSO TOWER ■アクリルナタワー・ロッソタワー 物件概要
 住戸6戸含む、他に管理事務室1戸、ゲストルーム1戸、キッズルーム1戸、身
 年11月10日付) ●販売戸数/3戸 ●間取り/31DK・41DK ●面
 積/104台 ●機械式昇降機

■アクリルナタワー・十
 号 (平成18年7月31日
 管理形態/区分所有
 都庁認可 (国土交通
 部) 販売 (代理) /ア
 会役員・(社) 百都國
 れます。 ※先着順販売

オール電化 × 免

△新日本建